釧路市立博物館紀要　第 40 輯　2022：5 － 14

釧路市内小学校におけるアイヌ歴史文化学習の取り組み
～博物館利用事例の検討～

城石 梨奈※

Approaches to Ainu's history and culture study at elementary schools in Kushiro city:
a case study on the use of the museum

Rina SHIROISHI ※

1. はじめに

2019 年にアイヌ施策推進法が制定され、2020 年には白老町に国立アイヌ民族博物館を含む民族共生象徴空間（通称：ウポポイ）が設立されるなど、国内におけるアイヌ文化の継承と社会への普及啓発が推し進められている昨今にあって、各学校現場でも児童生徒ら自身のアイヌの歴史や文化への関心が高まると同時に、学習計画の見直しや内容の充実が求められている。

筆者は、2017 年度より博物館において歴史・アイヌ文化担当の学芸員として勤務しており、アイヌ歴史文化学習[1]の一環で来館する学校を対象にした展示解説・学芸員講話や、学校での出前授業への派遣を依頼されることがある。それらの実践事例に加え、市内各小学校での取り組みの現状及び博物館利用の効果やニーズを調査したうえで、同学習における博物館の有効な活用について検討してみたい。

2. 小学校でのアイヌ歴史文化学習

小学校の学習指導要領において、アイヌ民族に関わる学習項目として取り上げられているのは小学 6 年生の社会科歴史分野における学習事項のみである[2]。ただし、その学習に先立ち、釧路市に限らず道内の小学校では 3・4 年生の社会科の学習事項である地域学習・郷土学習において、特に 4 年次でアイヌ文化についての学習をすることが多く、学習を進めるにあたっては自治体ごとに編集・発行している社会科副読本（「郷土読本」）を用いている[3]。釧路市内においても、小学校におけるアイヌ歴史文化学習は、社会科の中で郷土読本の記述をもとに学習を進める学校がほとんどであるが、「総合的な学習の時間」のなかで系統的な学習プログラムを展開する学校も見られるようになった。

北海道教育推進計画（2018（平成 30）年度～ 2022（平成 34）年度）のなかでも、「施策項目 9 ふるさと教育の充実」の一部として「アイヌの人たちの歴史・文化等に関する学習において、施設や人材を活用した体験を通した学習を行っている学校の割合」を 100% とする目標を掲げているが、釧路市内の小学校では小学 3 年生の単元「わたしたちの市の歩み」のなかの「かわる道具とくらし」、そして小学 4 年生の「地域で受けつがれてきたもの」[4]において博物館を利用した学習を実施する学校が毎年数校あるというのが現状である。

3-1. 博物館展示を利用したアイヌ歴史文化学習

釧路市立博物館には、現在の場所に移転改築した 1983 年当初より常設展示室 4 階にアイヌ文化展示「サコロベの人々」があり[5]、アイヌ民族関係資料の所蔵数約 850 点中、400 点ほどを展示している[6]。ただし、アイヌ関係資料を特に専門に担当する学芸員がいたことがなかったため、アイヌ文化についての出前授業のために学校へ講師派遣をすることはなく、学校が展示見学をすることはあっても、アイヌ文化をテーマにした講話などのかたちで協力するということもあまりなかった。筆者が当館で初めてアイヌ文化担当の学芸員として着任し、1 年目である 2017 年度には来館学習でのレクチャーと、出前授業についてそれぞれ 1 校ずつより依頼があり、2 年目の 2018 年 6 月には釧路教育研究センター郷土読本研究専門委員会主催のふるさと教育研修会が博物館を会場に開催され、アイヌ歴史文化学習と博物館の活用をテーマに講話をおこなった。同研修会には、市内の小学校から郷土読本を活用する学年である 3-4 年生の担当教員を中心に 31 名の出席があった。その後も、同専門委員会の企画による研究授業を城山小学校と共同で実践したり（2018 年 11 月）、各校に向けてこの実践事例の紹介をしていただき、徐々に博物館活用についての認知度は高まっているように思う。

3-2. 博物館展示見学・学芸員講話

アイヌ歴史文化学習の一環として博物館を見学する学校数はおそらく以前とそれほど変わりはないだろうが、展示解説や質疑応答、テーマを絞った講話の依頼は近年件数が増えている。筆者が着任して以降の件数は次に示す通りである[7]。

※　釧路市立博物館　Kushiro City Museum

【2017 年度】・・・1 校
【2018 年度】・・・3 校
【2019 年度】・・・1 校
【2020 年度】・・・6 校
【2021 年度】・・・6 校（2021 年 12 月現在）

来館学習で展示解説や講話を依頼される際は、大きく分けて 3 通りのパターンがある[7]。

① 概要説明形式・・・15 分から 20 分程度でアイヌ展示全体の解説。
② 質疑応答形式・・・事前に学校で児童からの質問を取りまとめ、来館時に学芸員がそれらに直接回答する。事前に質問を出させるため、学校での学習はある程度進めている段階で、調べても答えが見つからなかったという発展的な内容の質問・疑問が提出されることが多い。
③ テーマ講話形式・・・テーマを絞った内容での解説。たとえば「アイヌの音楽について」、「アイヌの子どもの遊びについて」など。

以上の 3 つであるが、それぞれ単体ではなく概要説明プラス質疑応答、テーマ講話プラス質疑応答、のように組み合わせることもある。①の依頼が最も多いが、近年は②の質疑応答形式が増加している傾向がある。

ここで当館の常設展示室の内容について触れておく。2 階が時系列を追った釧路地域の歴史を伝える展示になっており、旧石器時代に始まり、縄文、続縄文、擦文、オホーツク、“アイヌ文化期”の考古学遺物展示に続き、「幕末のクスリ場所」としてクスリ場所の絵図や場所請負商人に関わる文書資料や所縁の道具、クナシリ・メナシの戦いの夷酋列像の一部などが一つのウォールケースに展示されている。その後に続くのが、“開拓期”の各種産業に関わる道具の展示である。この時系列の展示とはいわば別枠として、4 階にあるアイヌ文化展示「サコロベの人々」がある。このような 2 階の歴史展示と 4 階のアイヌ文化展示の断絶は、アイヌ社会を「非歴史的で時間的な経過のないものと見な」す、民族誌的現在を象徴する展示であるということは言えるだろう（中村 2015）。当館のアイヌ文化展示そのものについての詳しい検討は本稿ではおこなわないが[8]、4 階のアイヌ文化展示においては歴史的なことや社会的なことについてはほとんど扱わず、ある一時期のアイヌ文化についての資料を展示していると言える。なお、学校のアイヌ歴史文化学習による活用は、4 階のアイヌ文化展示のみに基づくことがほとんどである。

3-3. 出前授業の実施

アイヌ歴史文化学習に関わる「出前授業」については、来館学習に比べると件数は少ないものの毎年 1 校以上は派遣依頼がある。

展示見学のほうがより多くの実物資料を見ることができ、教師の指導によりワークシートなどを活用した調べ学習もやり易くはあるのだろうが、出前授業は次のようなことで展示見学よりも利点がある。すなわち、校外学習の実施には、年間計画の中でかなり前もって決めておかなくてはならなかったり、見学に伴う交通費などの算段が必須である。講師を招聘することは、日程調整や予算の面で比較的柔軟に実施することができるようである。加えて、博物館見学はいつもの学校での授業とは異なったシチュエーションであるため、気持ちや頭を切り替えて見たものや聞いたことを吸収できるという側面がある一方で、普段の学習との連続性は感じにくいところがあるかもしれない。その点では、出前授業はあくまでも教師が主体で進めている普段のアイヌ歴史文化学習の流れの中にあるという感覚が強いだろう。その意味で、見学学習と出前授業では事前のねらいも、結果的に得られる効果も多少違うところにありそうである。

2017 年度以降に出前授業を実施した学校と内容の概要は以下の通りである。

【2017 年度】
10 月　C 小学校 4 年生（社会科）1 時間
【2018 年度】
11 月　C 小学校 4 年生（社会科）1 時間
　　S 小学校 4 年生（社会科）1 時間（郷土読本研究専門委員会 研究授業）
２月　Y 小学校 4 年生（総合）2 時間（釧路アイヌ協会と協働で実施）
【2019 年度】
12 月　S 小学校　4 年生（総合）1.5 時間（質疑応答形式）
【2020 年度】
12 月　Y 小学校 4 年生（総合）2 時間（釧路アイヌ協会と協働で実施）

出前授業の場合は特に、今回の学習のねらいや各校の学習全体の中での位置付けを教員との事前打ち合わせにおいて確認する。以下では、事例として 2018 年度に S 小学校で実施した郷土読本研究専門委員会の研究授業と 2018・2020 年度の Y 小学校での授業内容を記す。

S小学校（2018年度, 4年生1クラス, 21名）

この研究授業は、担当教員が授業を進め、学芸員がゲストティーチャーとしてコメントをするという形式で実施した。アイヌ民族の儀礼具や狩猟具などを数点用意し[9]、グループに分かれて、ワークシートをもとにそれぞれの道具の素材や用途を話し合ってもらう。道具は、チェプケレ（鮭皮靴）、パウンペ（儀礼用幣冠）、マキリ（小刀）、アットゥシ（樹皮衣）、ラウォマㇷ゚（筌）といった複数種の自然素材を用いているもの及び本州との交易品としてトゥキ（杯）を選定している。各グループが話し合った予想を発表後、学芸員が 1 点ずつ道具の素材と使い方の解説をしながら答え合わせをしていくという流れである。ねらいとしては、道具の素材や使用目的を考えることで、アイヌ民族が「自然の材料を生活の多くの場面で活用していた」こと、「生き物の色々

な部位がむだなく生かされていること」、「自然をいかに大切に考えていたか」を理解し、そこから民族の考え方（価値観）を探るということであった[10]。

この研究授業は社会科の１時間で実施したが、同校はこの翌年度から総合的な学習の時間でのアイヌ歴史文化学習プログラム「アイヌ博士になろう」（4年生で35時間：2021年度）を開始しており、2019年度は出前授業での質疑応答（1.5時間）、2020・2021年度は来館学習での質疑応答形式の講話を実施し、毎年継続的に協力している。

Y小学校（2018・2020年度,4年生3クラス,116名・131名）

2018年度及び2020年度にＹ小学校でおこなった出前授業は、釧路アイヌ協会と協働で実施した。教員との最初の打ち合わせにて、この時限は「社会科で学習した「アイヌの人たちのくらしのうつりかわり」[11]の発展的な学習」であり、「実際のもの（道具）を見ながら情報を補完する内容」や「アイヌ語、踊り、料理、楽器など、アイヌ文化の体験的な内容」に取り組むような授業、という学校側の希望を確認していた。

いずれの年も、4年生の総合的な学習の時間の中で実施され、3クラス合同で2時間連続の授業とし、前半に学芸員による講話とアイヌ語かるた（単語カード[12]・図１）を使った活動、後半に釧路アイヌ協会による歌・踊りの指導及び楽器（トンコリ・ムックリ）の実演という流れで実施した。講話の内容は、まず「アイヌ語じゃんけん」と「体の部位の歌」でアイヌ語に触れ、続いて先住民族の話、アイヌの伝統的な衣食住、世界観、アイヌ語地名の話をおこなった。単語カードを使った活動は、2018年度はおおよそ10名ずつの12グループに分かれてあらかじめ選定した20単語のカードをかるたとして取り合い、アイヌ語の発音と意味を覚えるという形式にしたが、2020年度は、より全員が参加できるようにという理由から、単語カードを使ったフルーツバスケット（アイヌ語バスケット）に変更した。2020年度は4単語に単語数を減らし、1グループあたりの人数を多くして6グループにした。この変更により全員が体を動かして楽しく参加できる要素は強まったが、アイヌ語の単語と意味を繰り返し覚えるという要素は弱まったように思われた。歌・踊りについては、いずれの年も釧路地方に伝わる座り歌（ウポポ）2曲を輪唱で練習し、フンベリムセ（鯨踊り）を全員で踊った。ムックリとトンコリは、演奏を聴いてもらった。

同校でのアイヌ学習にかける時間数は2021年度で社会科の6時間のみであるが、来館学習で質疑応答形式による講話を実施している。

図１．アイヌ語単語カード

4. 釧路市内小学校での取り組み調査

以上で見てきたように、展示見学と学芸員講話、また出前授業という形で博物館や学芸員をアイヌ歴史文化学習に活用する学校は増えてきてはいるが、市内の全小学校数からいうと多くの学校が活用しているとは言えない。そこで、釧路市内の小学校でのアイヌ歴史文化学習の取り組み状況について、および博物館活用に向けての課題について調査を行った。調査方法は、2021年10月中に釧路市内26校の小学校を対象にメールで調査票を送付し、すべての学校からメールないしはFAXにて回答を得た。調査の対象は4年生担当の教員とし、1学年に複数の学級がある場合は、代表して1名からの回答または複数意見集約のどちらでも問わず、１校１通の回答を依頼した。調査結果は表１・表２の通りである。以下ではそれぞれの調査項目について見ていきたい。

問１～４（表１）は各校での学習への取り組み状況について聞いている。まず、問１はアイヌ歴史文化学習をどの教科で扱っているかについてである。市内26校中、25校が社会科で実施し、うち２校は同時に総合的な学習の時間でもさらに取り扱い、うち１校は音楽科にて古式舞踊を取り入れた実践をおこなっている。1校のみ、総合的な学習の時間だけで取り扱っているという学校があった。

それでは、学習にかける時間数はどのくらいなのかを問２で聞いている。10時間未満という学校が19校で7割強である。10時間以上20時間未満及び20時間以上30時間未満の学校がそれぞれ3校ずつあり、30時間以上をかけている学校が1校あった。最低時間数は4時間、最高時間数は35時間であり、かける時間数の差が大きい。

問３は学習の教材についてである。次節で触れる釧路市教育委員会発行の社会科副読本「郷土読本くしろ」を全ての学校で用いており、その他に教科書が3校[13]、公益財団法人アイヌ民族文化財団が発行している副読本「アイヌ民族：歴史と現在」が9校、その他としてYouTubeやビデオなどといった映像

素材、図書館の本、外部講師として招聘するアイヌ協会の方が用意する教材を挙げているのが5校である。

問4では、4年生での地域学習以外にアイヌ民族について学習する単元があるかを聞いている。この問いについては、この調査の名称自体を「アイヌ文化学習の取り組み調査」としたこともあり各校での解釈が分かれてしまったように思う。冒頭でも触れた通り、6年生の社会科（歴史）では鎖国期の対外関係という文脈でアイヌとその文化について学ぶということになっている。また、「憲法とわたしたちの暮らし」を挙げているのは、先住民族の人権についての学習があるためだろう。「アイヌ文化」について特に学ぶのは4年生であることはほとんどの学校で共通しているが、さらに歴史や公民分野でアイヌ民族に触れている部分もこの問いへの回答に含めているかどうかで相違がでてしまったと考えられる。唯一、阿寒湖義務教育学校だけは総合的な学習の時間「阿寒湖学」にて小学校3年生以上が毎年体系的に学習するという部分が他校と異なっている。

問5以下（表2）は、博物館活用に関する問いである。問5を見ると、2021（令和3）年度に、アイヌ歴史文化学習として展示見学や出前授業で博物館を利用した、または利用する予定があるかということについて、8校が「ある」、17校が「ない」、1校が「未定」という回答であった。利用していない場合の理由について、「1. 必須ではない」、「2. 希望はあるが時間数が足りない」、「3. 所属校での活用の先例がない」、「4. 活用の仕方がわからない」、「5. コロナウイルス感染症予防のため課外活動を制限している」、「6. その他」、からの選択式（複数回答可）としている。「1. 必須ではない」が1校、あとは、「2. 時間数が足りない」（5校）、「3. 感染症予防のため活動制限」（10校）が多い。その他の理由として挙げられているのが、「遠いから」、「移動手段の費用が大きい」など、課外授業の実施にあたる時間や費用の確保の問題である。また、昨年度見学済み（3学年時に「昔の道具」の学習のため博物館見学をしたので2年間連続での来館はしない）、今年度は別の社会見学を実施済みなど、社会見学枠の制限が挙げられている。

問6では、アイヌ歴史文化学習において博物館に期待することについて複数回答可で聞いている。「1. 博物館を利用したこと／する予定がないので特にない」という回答は0校、「2. 実物の展示資料を見ることでアイヌ文化についてより理解を深めること」が23校と最も選択が多く、「3. アイヌ文化についての概要を学ぶこと」が14校、「4. 学芸員に専門的な話を聞くこと」が20校、「5. その他」として「触れたり使ったりして体験する」という回答があった。この問いの前提には、博物館見学や出前授業を実施する際に、その学校がどの程度アイヌ歴史文化学習を進めているか、ということに各校で違いがあると感じていたため、それを確認する意図があった。「3. アイヌ文化についての概要」を求める学校については、学校での本格的な学習に入る前に概要を掴んでおきたいという思いがあり、2. 及び4. は、学習した内容について実物資料を見ることでさらに理解を深める、学習の中でわからなかったことやもっと深く知りたい点について学芸員に聞いてみる、といった発展的な段階での利用を企図しているように思う。また、実物資料を見るだけでなく、触れたり道具の使用を体験するなどの希望があることもわかった。

問7は、アイヌ歴史文化学習のなかで2021年度に博物館以外の外部機関・講師を活用した／する予定について聞いている。利用済みまたは予定があるのは6校で、具体的には釧路アイヌ協会、（公財）アイヌ民族文化財団、阿寒アイヌ民族文化保存会が挙がっている。なお、この集計表上からはわからないため付記しておくと、博物館と釧路アイヌ協会の両方を活用している学校が1校あるため、2021年度のアイヌ歴史文化学習で何らかの外部機関・講師を活用しているのは13校となり、ちょうど市内の小学校の半数である。

最後に、博物館の利用に関する意見や要望などを自由に記述してもらったところ、すでに今年度利用した学校からはその感想が寄せられたほか、やはり来館手段の確保を課題と感じている旨の意見が複数あった。

調査結果を総括すると、市内の小学校でのアイヌ歴史文化学習への取り組みは、時間数や内容の面で学校によってかなり差がある。取り組みたいという希望はあっても未だ全体的な指針や仕組みが整えられていない状況にあり、各学校（とりわけその年の4年生の担当教員）の熱意次第という部分が大きいと考えられる[14]。博物館の活用に関しては、2020年度からは感染症予防の観点から外部との接触が難しくなっている影響があるにもかかわらず3-2節で見た通り利用数は増加している。特に遠隔地にある学校などは移動手段の確保が主要な課題となっており、その点をクリアできればさらに活用は進むのではないだろうか。

表1 釧路市内小学校でのアイヌ歴史文化学習取り組み調査の結果（問1～問4）

設問番号	設問および選択肢	回答校数	自由記述
問1	今年度の授業計画の中で、アイヌ文化学習（アイヌ民族の歴史や文化についての学習）をどの科目で扱っていますか？		
	社会科	25	
	総合的な学習の時間	3	
	その他	1	音楽科（「ツルの舞」や「剣の舞」の動画を見て踊ってみる活動）

問２	アイヌ文化学習にかける年間の授業時間数は何時間ですか？		
	10時間未満	19	※最低時間数・・・4時間, 最高時間数・・・35時間
	10～19時間	3	
	20～29時間	3	
	30時間以上	1	

問３	アイヌ文化学習に利用する教材はどのようなものですか。		
	郷土読本「くしろ」	26	
	教科書	3	
	「アイヌ民族：歴史と現在」（公益財団法人アイヌ民族文化財団）	9	
	その他の教材	5	・アイヌ協会の方から学ぶ ・アイヌ協会の方々が準備する教材 ・市立図書館から借りた本 ・映像資料. ビデオ, YouTube動画（3校）

問４	貴校では、小学校4年生での学習以外にアイヌ民族について学ぶ機会がありますか？		
	ある（学年と単元　　）	6	・6年　社会科（歴史）鎖国の頃の交流など ・6年　幕府の政治と人々の暮らし（2校） ・6年　ともに生きる暮らしと政治・幕府の政治と人々の暮らし ・6年　社会「憲法とわたしたちの暮らし」 ・3～9年　総合的な学習の時間「阿寒湖学」
	ない	19	
	無回答	1	

表２　釧路市内小学校でのアイヌ歴史文化学習取り組み調査の結果（問５～問８）

設問番号	設問および選択肢	回答校数	自由記述
問５_1	貴校では、今年度のアイヌ文化学習で博物館を利用しましたか（展示見学または学芸員による出前授業）。または、年度内での利用の予定がありますか。		
	ある	8	
	ない	17	
	未定	1	
問5_2	→ない場合、理由をお答えください。（複数回答可）		
	1. 必須ではない	1	
	2. 希望はあるが時間数が足りない	5	
	3. 所属校での活用の先例がない	0	
	4. 活用の仕方がわからない	0	
	5. コロナウイルス感染症予防のため課外活動を制限している	10	
	6. その他	6	・移動の手段の確保に係る費用が大きすぎるため。 ・遠いから ・今年度は別の社会科見学先だったため ・昨年度に博物館見学をして事前学習済みだから ・コロナの関係で、昨年度、博物館を見学しているので。 ・今年度は、まだアイヌ文化に関する学習をしていない。また、今後アイヌ協会の方を講師に招き、社会科で学習した内容を深めたり・広めたりしたいと考えているため。 ・昨年度はアイヌ協会から道具や服を借りて学習した。今年度は未定

問6	アイヌ文化学習において博物館を利用する場合、期待することはどのようなことですか。（複数回答可）		
	1.博物館を利用したこと／する予定がないので特にない	0	
	2.実物の展示資料を見ることでアイヌ文化についてより理解を深めること	23	
	3.アイヌ文化についての概要を学ぶこと	14	
	4.学芸員に専門的な話を聞くこと	20	
	5.その他	2	・触れたり使ったりして体験する。

問7	今年度、博物館以外にアイヌ民族の歴史・文化を学ぶために利用した／する予定の場所・施設や外部講師の招聘はありますか？		
	ある	6	・（釧路）アイヌ協会（3校） ・公益財団法人アイヌ民族文化財団（2校） ・阿寒アイヌシアター　イコロ/阿寒アイヌ民族文化保存会
	ない	20	

問8	博物館利用についてのご意見やご質問、ご要望などがあればお書きください。		・10/29本日見学学習で利用させていただきました。学芸員の方の説明が大変わかりやすく、子どもたちもしっかりと理解できました。1クラス30分という短い時間でしたが、もう少し長く設定しても良かったかもしれない、と思いました。 ・短い時間の中でたくさんの質問に答えてくださり、ありがとうございました。実物を見ながら説明を聞くことができ、理解が深まりました。 ・博物館から貸し出して頂ける物などをもっと知って児童の学習に生かしていきたいので、その情報がどこから知ることができるのか、発信して頂けると嬉しいです。 ・展示物の説明表示にふりがなをふっていただけるとありがたいです。（4年生で未修の漢字があるため） ・昔の道具の学習（3年生）での出前授業、4年生の社会見学での丁寧な対応など、いつも大変お世話になっております。今後もどうぞよろしくお願いいたします。 ・毎年、本校の教育活動にご協力いただき、感謝申し上げます。今年もよろしくお願いいたします。 ・特にありません。ただ、使用させていただくときに、遊学館学習のように「無料バス」の運行をしていただけると利用がしやすいかもしれません。 ・市で利用できるバスなどを派遣していただけると、見学しやすくなります。 ・市内全校が参加する「サイエンスルーム」（遊学館）のように、（小6）年に1回、小4が博物館を利用する機会があるとうれしい。 ・他校で学芸員さんを招いて授業実践した例を見たり、確認したりしながら、自校にあった内容を吟味したいと思います。

5. 釧路市の郷土読本「くしろ」の記述について

前節で見た通り市内のすべての学校において活用されている郷土読本であるが、その記述については郷土読本専門委員会で毎年内容の見直しを行なっており、令和２年度改訂版よりアイヌ文化に関わる内容を書き換えている。改訂前は、第６章「昔から今へと続くまちづくり」のなかの第１節「アイヌの人たちのくらしのうつりかわり」での記述であったのが、改訂後は第４章「地域で受け継がれてきたもの」のなかでの扱いとし、旧版のアイヌの歴史・文化だけをテーマに特化させた記述から、改訂版では地域の他の伝統文化（具体的には「釧路鳥取かさおどり」）と併記しながら現在に受け継がれている文化として阿寒湖アイヌコタンを中心にしたアイヌ文化保存会での古式舞踊の伝承を取り上げている。また同節にて、学習する上での参考資料として次の記述が８ページにわたって記載されている。すなわち、アイヌ語地名、アイヌ文様、歴史（和人がうつり住んできたこと、クスリ場所、チャシの説明）、伝統的な衣食住・信仰・芸能の記述、続いて2005年に市町村合併によって釧路市となった阿寒地域及び音別地域の遺跡やアイヌ語地名、松浦武四郎の「クスリ日誌」での記述などに触れ、さらに松浦武四郎の人物紹介と、アイヌ語、現在の文化伝承活動や普及活動について紹介している。

本改訂（令和２年度版）にあたっては、郷土読本専門委員会からの求めに応じて、アイヌの伝統衣装など博物館資料の画像提供という形で協力を行った。内容についても、筆者を含め外部からの意見も伝えたが、基本的に内容執筆のための調査や執筆自体は担当の専門委員のみでおこなうということや、編集のための期間も限られていたために意見の反映

をすることが難しい部分もあったようである。特に大きな点としては、副読本を用いて学ぶ主体が、和人の児童だけではなくアイヌ民族の児童も含むという実際の状況があるため、アイヌ民族の側から見た地域の歴史や文化という視点を取り入れるという配慮や、異なった民族同士の関係構築のために顔のわかる個人を取り上げる＝地元のアイヌ民族を紹介するという点などが保留になっている。今後、関係各所の協力体制を整備しつつ地元の素材の掘り起こしや調査を経た上で更なる改訂が求められよう。

6-1. 展示解説の際に話すポイントー伝えようとしていること

さて、博物館の活用に話を戻すが、常設展示室にてアイヌの歴史文化についての講話をおこなう際には、基本的には展示している資料に基づき、展示の流れに沿って説明することになる。もともと各学校から求められることによって話す内容も変わってくるが、3-2 節で挙げた①～③のうちいずれのパターンなのか、時間がどのくらいあるのか、そして話を聴いている様子や反応からわかる児童の理解度がどの程度であるか、ということも話す内容に作用する。しかし、いずれの場合であっても伝えておかなくてはならない事項があると思っている。1つ目は、展示されている資料の時代と、現在という時代のギャップについて、2つ目にアイヌ文化の地域性、3つ目にアイヌ文化のエッセンスとも言える世界観である。さらに、当館の展示には実際に触れたり間近で見たりできる資料がないため、何点か触れても良い素材（マレク（突き鉤）、魚皮、樹皮繊維、ムックリなど）を用意することも多い。

まず1点目の時代についてである。冒頭で述べたように、学校でのアイヌ歴史文化学習は歴史を学ぶ前の小学4年生で実施する。それまでアイヌ文化についてはメディアや観光地、家庭を通して知る情報が主である児童が多い。無論、釧路周辺地域にはアイヌ民族として生まれ、幼少期よりアイヌ文化に触れて育つ子どももいれば、アイヌ民族として生まれ、そのことをなんとなく知っていても“アイヌ文化”に接することもなく育つ子どももいるということは常に念頭に置いていることである。ただ、多数派である、アイヌ民族やその文化との接点がほとんどないように見える児童生徒にとって、学校で学習する内容や、博物館で見るアイヌ民族関係資料が与える印象はどういったものかを考えると、今までもさまざまに指摘されてきているように[15]、遠い昔にどこかに存在していた、自分達とはかけ離れたものとして認識されるというおそれがあるように思う。そのような意識から、展示されている資料がどのくらい前にどこで使用されていたものなのか、現在もアイヌ民族は周りにいるということ、自分自身や同級生がアイヌ民族である可能性もあるということを想起させると同時に、今現在は昔ながらの伝統的な生活をしているわけではない、展示されている道具はかつて使われていたものが大半である[16]、ただし現在も伝統文化継承のために用いる道具もあるということにも基本的に言及している。しかし、その説明が子どもたちにどの程度理解ないし納得されているのかは、博物館を訪れるほんの1時間足らずの時間の中でその反応から推し量ることができない。博物館見学や出前授業は学校でのアイヌ歴史文化学習の一部であるため、この学習全体を通してそのようなメッセージを伝えないことにはなかなか内面化はされないだろう。

2点目の地域性については、アイヌ文化には言葉、習慣、道具などに地域差があり、当館では特に釧路地域のアイヌ文化について紹介しているということを、釧路アイヌという文化集団の分布域を展示室の地図で確認しながら説明している。時間がある場合は、別の地域の習慣などを実際の資料を参照しつつ紹介することもある。

3つ目の世界観の説明は、霊送りの考え方やカムイとアイヌの関係性について、イオマンテの祭壇（ヌササン）の前でおこなう。近年は漫画・アニメのゴールデンカムイの影響もあり（小学生にもクラスに数名は読んでいる児童がいる）、カムイという単語の認知度も上がっており、関心も高い。この説明をする際には、カムイという存在に想像をめぐらせながら聴いているのか、祭壇が神聖なものだという意識が働くのかはわからないが、それまで多少騒がしくても静かに聴き始めることが多いように感じる。

次節で触れるように、資料をケース越しで見るのではなく間近で見て触れるということの効果は非常に大きい。小学生では特に、魚皮やマレㇰなどの実物を手にしてその特性や動きなどを説明するととりわけ反応が大きくなる。

6-2. どのようなことが伝わるのか？―博物館を訪れた児童の感想文をもとに

では、博物館展示の見学や出前授業を通して、児童生徒にはどのようなことが伝わっているのか。今までのところ、こちらから積極的にフィードバックを受け取るために働きかけたことはないが、学校によっては事後学習・手紙の書き方学習の一環として感想文をまとめ、博物館宛に送付してくださることがある。また、総合的な学習の時間でアイヌ歴史文化学習に取り組んでいるS小学校は、学習のまとめとしてアイヌの歴史文化を素材にした企画の発表会を催し、他学年の児童や保護者にその学習成果を伝えるという取り組みを2020年度より行っており、協力者として筆者も参観することができた。発表会では、クイズの内容に学芸員が説明した事項を参考にしたり、アイヌ協会の指導によって学んだウポポ（座り唄）やムックリの演奏を説明を交えながら披露したりと、自分達の調査に外部講師から学んだことも積極的に取り入れている。

本節では、2つの学校の感想文の内容から、児童に伝わっていることないしは印象に残っていることについて見ていきたい[17]。まず表3は、K小学校[18]が2020年11月に来館した際の感想文である（4年生43名）。学習はまだそれほど進んでいない段階とのことであったが、事前に8問の質問（樹皮衣の作り方、家の建て方、料理、災害、争い、和人とアイヌの関係、地域による違いなど）を考えて送ってくれており、来館当日は質問への回答を含めた展示解説をおこなった。表4は、総合的な学習の時間で取り組ん

でいる既述のＳ小学校[19]の来館後の感想文である(2021年10月来館，4年生21名)。学習が進んだ段階[20]で、事前に23問の質問（儀式、楽器、踊り、料理、道具、舟、家、口承文芸、衣服文化、名前の付け方など）を寄せ、質疑応答形式での展示見学をしている。

Ｋ小学校の感想文全体からは、博物館を見学できたということ自体や、色々な説明を聞くことができたことへの喜びの感想が多いように感じられる。また、間近に見てもらう素材としてこちらで用意したものへの関心も表現されている（K2, K4)。たまたま博物館見学以前に家族と来館した際に一度解説を聴いている児童や、阿寒湖とアイヌ文化が結びついている児童など、学校以外の場でアイヌ文化への関心が一定程度既に養われている児童が複数いることも特徴的である（K1, K8, K13)。また、こちらとして伝えたいことの１つである地域性について印象に残してくれている児童もおり（K9)、実際に展示資料を見たことで理解が深まったという感想も多い(K6, K7, K10, K11, K12, K14, K15)。

Ｓ小学校の感想文には、特に印象に残っていることについて書いてくれている。感想からわかるのは、自らが質問した事項についての回答については特に注意して聞き取り、記憶にも残っているということである（S12, S13)。自分が考えて出した疑問については回答が特に気になるというのは当然と言えば当然であろう。また、具体的な数字を出して答えた回答については印象に残りやすい（メモをとりやすいからか）ということである（S4, S6, S8, S12)。こちらとしては、衣服に使う魚皮の枚数などは一例として挙げたつもりだが、魚皮衣にはサケの皮を40匹分使う、ということが一般知識としてインプットされてしまうことには、説明の際に注意が必要だと思わされる。また、実際の資料を見ることで驚きや新たな発見をしている児童もいる（S1, S12, S14, S15)。それぞれにいろいろなことが印象に残っているようだが、意外と多かったのは、“記憶力”についての回答への驚きである。事前にいただいた質問に、「伝えられている話を忘れてしまったら、どうするのか」という口承文芸に関するものがあったため、アイヌ民族は出来事や物語を口伝てで語り継いできたので、記憶力が普段の訓練によって鍛えられているという旨の回答をしたところ、そのようなある種の“すごい能力”についてのエピソードが非常に印象に残ったようだった（S9, S12, S13, S16)。

表３　Ｋ小学校（2020年10月来館）からの感想文

K1	実は社会見学以前に、城石さんにアイヌのことやはくぶつかんのことなどを教えていただいていました。その時はアイヌ文化のことなどがすごくわかりとても勉強になりました。次また会うことができたら、博物館のことやアイヌ文化の事を教えてください。
K2	社会見学の時は、アイヌ文化のことについてしつ問にくわしく教えてくださりアイヌ文化についていっぱい知り勉強になりました。本当にありがとうございました。さけの皮やムックリなど私達のためにいろいろ用意や説明がとても分かりやすかったです。
K3	先週はアイヌのふくや刀、カムイ、こたんころカムイ、いっぱい教えてくれてありがとうございました。刀の名前を覚えました！！（イコロ）あとはアイヌの楽器を教えてくださりありがとうございます。これからもアイヌのことを教えるようにがんばってください。
K4	この間はアイヌの文化について、くわしく教えてくださり、本当にありがとうございました。サケの皮や、ムックリを見せてくださったのでとてもよく分かりました。次にはくぶつかんに行く時はいつもより楽しみです。
K5	先週は、アイヌの事をたくさん教えていただきありがとうございました。城石さんの説明が上手だったからよく伝わりました。これからもがんばるので城石さんもがんばってください。
K6	この間はアイヌ文化について教えていただきまことにありがとうございます。アイヌの人が使っていた道具を見せてくださったのでよく分かりました。例えば服（アットゥシ）はサケのかわや木のかわなどで作っていることがわかりました。他にも刀（イコロ）という名前だとわかりました。
K7	博物館には、アイヌの服や食べ物や道具などたくさんありました。トリカブトのどくで、えものをころしていたことがわかりました。くつの中にあったかいくさをいれていたことや、木の皮で服を作っていたこともわかりました。
K8	この前は、アイヌ文化について教えてくださり、ありがとうございました。わたしは、社会見学の前にも一度城石さんに教えてもらいました。その時とちがうお話をしていただき、新しいことをまた知れました。昔は耳かざりは男の人もつけていたなんてきいた時、ええーと大きな声でいってしまいました。またいつか、おじいちゃんと行きたいと思っています。
K9	わたしは、教えていただいた中でくつをサケの皮で作っている理由や、つるをサルルンカムイということを知ってびっくりしました。他にもアイヌ語でも、ちいきによってちがうことやしかをたくさんとっていたこともよくわかりました。
K10	この間は、アイヌのくらしなどをくわしく教えていただき本当にありがとうございました。アイヌが着ていた服などを実さいに見れてよく分かりました。わたしは、アイヌについて細かくは知らなかったので知れてとてもうれしかったです。そしてわたしは、ムックリが何でできているかよく分からなくて竹でできていると言っていたしゅん間わたしはなるほどとわかってうれしい気持ちとわからなくてもやっとしていた気持ちがすっごくすっきりしました。
K11	この間は、アイヌ民族のことをくわしくたくさん教えていただきほんとうにありがとうございました。昔の写真やアイヌ民族につかわれていた道具をみせてくださったのでとてもよくわかりました。その教えてもらったことをみんなと話していたら話が弾んでとてもたのしくなりました。わたしは、小さいころそちらのはくぶつかんにいったことがありました。わたしは、毛のあるどうぶつをとてもこわがっていました。時には泣いていることもありました。次に行くのをたのしみにしています。
K12	この間は、アイヌ民族のことをくわしく教えてくださり、本当にありがとうございました。アイヌ民族のてんじ物や写真を見せてくださったのでとてもよく分かりました。友だちと教えてくださったことを話しているとすごく勉強になったし楽しかったです。そして、アイヌ民族のことがたくさん知れてよかったです。また、こん度博物館に行きたいなあと思いました。

K13	先週はアイヌの楽器や生活道具やイオマンテの道具などの説明ありがとうございます。私も城石さんのようにもっとアイヌについて調べて城石さんのようになりたいです。私は毎年あかんに行くのですがもっと楽しみになりました。
K14	イランカラプテ アイヌのことがしれてたのしかったです。アイヌの人がたべてたものをみてびっくりしました。魚用の弓矢をみてこんなのがあるんだなとおもいました。アイヌの人の服がサケの皮でできてるのをきいたとき、びっくりしました。
K15	この間はいろんなことを教えてくださりありがとうございました。サケの皮でつくった服や木の皮でつくった服を見せてくださったのでとてもよく分かりました。またはくぶつかんにいっていいですか。

表４　S 小学校（2021 年 11 月来館）からの感想文

S1	わたしが一番びっくりしたのは、丸木舟の大きさがすごく大きいことがびっくりしました。他にも知らない道具がたくさんあってすごいなと思いました。
S2	特に心に残ったことは、アイヌ人が和人からもらった宝物について知れたことです。特に宝物のことを教えてもらった中でも心に残ったことは、太刀の読み方を教えてもらったことです。
S3	わたしは、アイヌ人が使っていた物に種類があることをあまり知りませんでした。でも城石先生が丸木舟のことや儀式、楽器のことを教えてくれたので丸木舟には大きい種類、小さい種類があることを知りました。
S4	アイヌのくらしが知ることができてよかったです。サケの皮で作る服は40ぴきも使うことがわかりました。服をサケの皮で作っていたこともわかりました。
S5	アイヌのことについていろいろ知ることができてよかったです。心に残ったことは赤ちゃんのことをきたない言葉で読んで成長してからくせなどをもとにして名前をつけることです。あと、舟を金ぞくせいの物でほって作るということも心に残りました。
S6	服に使うサケの皮は四十ぴき分位使っていることにおどろきました。産まれてきた赤ちゃんはその赤ちゃんの特ちょうで名前をよんでいることが知ることができてよかったです。
S7	たくさん色々な事を教えてくれてありがとうございます。一番心に残った事は、はずかしい事や、人に言えない事は、ムックリで気持ちを伝えていると聞いた事です。そして、私は儀式は、外でしかしないのかと思っていたけれど、城石さんの話を聞いて家の中でも儀式をすると聞いて私はびっくりしました。
S8	アイヌのことを知れてよかったです。一番心に残ったことはチプのことで博物館にあったチプは五、六人しか乗れないと言ってたけど、城石さんが十人も乗れるのがあると言っておどろきました。
S9	一番心に残ったのは、ムックリで自分の思いを伝える事を初めて知ってびっくりしました。次におどろいた事は、アイヌの人は訓練をしているから記おく力がすごいと思いました。アイヌのことを色々教えてくれてありがとうございました。
S10	アイヌのことをたくさん知れてよかったです。子どもは生まれてすぐ名前をつけないことや、めいじになると現ざい育てられていない物を農業で作っていたこと、あとサケの皮をあむ時はお湯につけて、やわらかくしてからあむことを教えてくださってありがとうございました。
S11	私が一番心に残ったことは、アイヌの女の人を男の人の役わりがあった事です。女の人は、機械に糸をセットして、服を作っていた事で、男の人は、何も作っていないと思ったら、は物やアイヌ文様が入ったお皿を作っていたことが心に一番残りました。
S12	わたしは、てんじしてあった物でオオウバユリのおだんごがおいしそうでおなかがすいてしまいました。びっくりしたこともあります。それは、サケの皮の服はサケの皮を40枚ぐらい使っていることです。私の記おく力のしつ問の答えが「訓練をしていたから。」だったので「大変だな。」と思いました。
S13	アイヌ人が記憶力がいいのは訓練したからと言った時、びっくりしました。訓練しただけで記憶力がいいというのは、本当におどろきました。そしてぼくのチームのしつ問のトンコリの儀式はいつからやっているのかでしつ問したら最近の事と言ってかい決してよかったと思います。いろいろしつ問に答えてくれてありがとうございました。
S14	神様が人間に変そうしてたまにアイヌ人がいる所に来るというのがびっくりしました。丸木船を実さいに見てみると思ったよりも大きかったです。海に使う船もアイヌ人が作っていたって聞くとすごいなあと思いました。
S15	アイヌの色々な事を教えてもらい、色々な事を知る事ができました。儀式をする時に使う物を見た時すごくおどろきました。カニムックリや、カニムックリのゆらいなど教えていただき、本当に感しゃしています。
S16	アイヌの船の事を教えてくれてありがとうございました。アイヌの赤ちゃんにはすぐ名前をつけないとか、アイヌの人は記おく力がなぜすごいとか聞いて理由は、訓練をしているからとかアイヌの家のこととかを教えてくれてありがとうございました。
S17	一番心に残ったことは、アイヌの儀式についてです。儀式中に言葉を言っていることや楽器を使っているのかを教えていただきありがとうございました。

7. 今後の課題

本稿では、釧路市内の小学校におけるアイヌ歴史文化学習の取り組みについて、特に博物館の活用という点に主眼を置いて見てきた。清水（1996）などで指摘されて以降、現在も依然としてアイヌ歴史文化学習についての取り組み状況は道内でも地域により大きな差がある。社会科副読本は自治体ごとに作成されているため自治体間の差もあるが、同じ自治体の中でも学校による差が大きい。これはアイヌ歴史文化学習の中で伝えるべき知識が未整備であるため、教育方法の仕組みが確立されておらず、教員個人の教材開発への熱意や学校の立地や周辺の資源などに大きく左右されることが要因である。釧路市内のアイヌ歴史文化学習の取り組み状況も同様であるが、大枠の仕組みが整う以前であっても、まずは市内の関係各機関の連携体制を整えることは可能ではないだろうか。未だ個人同士のつながりによって外部の施設や人材に協力を依頼しているというケースが多いように感じるが、情報を集約し発信するという役割を行政が担い、どのような学習メニューがあり、誰（機関ないしは個人）がそれを提供できるのか、ということを学校に周知することができると良いと考えている。

次に、アイヌ歴史文化学習の一環で博物館を利用

してもらう際に、学習のどの段階で利用するのが最も効果的なのか。これについては、全体の学習過程を見ていない立場からではあるが、明らかに言えるのは学習をかなり進めてから来館して実物を見る方が遥かに児童の反応がよく、理解度が深まっていそうだということである。それぞれの学校の都合があり、今以上に多くの時間数を費やすことができなかったり、ある程度学習を進めた段階で博物館見学を実施するというタイミングを持つことができない場合もあるだろう。しかし、有効性の面からはできるだけ発展的な学習で取り入れることを勧めたい。言うまでもなく、学校のアイヌ歴史文化学習は教師が主体となって組み立て、そこに外部の施設や人材をどのように活かすかということまでを考えることが基本である。博物館は、いわば一つのメニューを提供する側であるが、学校外部の支援者との横の連携をはかり、学校側が求める内容とのすり合わせを定期的に行いながら、素材とそれを担うことのできる人材を揃えていくということが理想であろう。今後も継続して教員や他の支援者と共に新しい学習メニューの開発などに取り組んでいきたい。

註

1.　4節で検討する小学校での取り組み調査の際は「アイヌ文化学習」という用語を使用していたが、ここで扱うアイヌに関する学習には歴史的な事項も含むため、本稿全体では「アイヌ歴史文化学習」に統一することにする。

2.　鎖国期の対外関係として、北方との交易をしていたアイヌとその文化について触れること、としている（学習指導要領 平成29年改訂版）。

3.　伊藤（2013）

4.　いずれも『郷土読本くしろ』令和2年度改訂版以降の単元名。

5.　現在の建物での開館（1983年）はもとより、1936（昭和11）年に釧路市立郷土博物館として設立された当初よりアイヌ民族資料のコレクションを所蔵・展示している。

6.　所蔵資料数、展示資料数ともに祭具・民具などの一次資料の数であり、その他に展示している写真、アイヌ絵、図表などのパネルの点数は含まない。

7.　依頼をいただくのは釧路市内だけでなく釧路管内を中心に市外の学校からもあるが、本稿では釧路市内の小学校について検討するため、ここで挙げているのは釧路市立の小学校に限定した件数である。また、筆者が不在のため別の職員が対応した例もあるが、その件数はここに含んでいない。

8.　付言すると、特に学校だけを意識してのことではないが、4階の常設展示には伝統的・現代的な工芸技術、物語や歌踊りを含む口承文芸、儀式などといった現在の文化伝承活動や現在のアイヌ民族の様子を伝える内容を少しずつ加えているところである。

9.　博物館所蔵資料には実際に触れてもらうことのできる資料がほとんどないため、釧路アイヌ協会が外部に貸し出している資料を使用。実物を用意できなかったものに関しては、博物館資料の画像を使用。

10.　本授業は学校が主導で授業計画を立てているため、ねらいも学校側で設定した内容。

11.　2018年度当時の単元名。

12.　アイヌ民族文化財団発行の『アイヌ語教材テキスト』付録の補助教材。単語カードは方言別に対応していなかったので、一部の単語については釧路方言に修正、さらに見えやすいように拡大コピーして使用。

13.　6年生の歴史で扱う単元を含んでいる可能性がある。

14.　アイヌの歴史文化を教えるにあたっての体系的な知識の枠組み欠如のため、「教員の個人的な関心や資質に強く依存した授業が行われている」ことの問題点はかねてから様々に指摘されている。米田（1996）、清水（1998）、鈴木（2007）など。

15.　百瀬（2016）など。

16.　具体的には、資料の収集年代はおおよそ大正期から昭和初期のものが多いため、実際に使用されていたのは約100年前くらいであろう、と説明している。

17.　手紙の書き方の練習であるため、時候のあいさつに始まり結びの文章まで丁寧に書かれているが、ここでの引用ではそれらは割愛している。また、感想文の引用にあたっては各校の了承を得て掲載している。

18.　アイヌ学習にかける時間数は社会科9時間（2021年度）。ただし、感想文を寄せた2020年度の学習時間数については未調査。

19.　アイヌ学習にかける時間数は総合的な学習の時間で35時間（2021年度）。

20.　35時間中、課題設定に4時間、続いて情報収集にかける13時間のうち9時間を体験活動、博物館での取材活動に4時間を設定している（S小学校「令和3年度総合的な学習の時間　年間計画」による）。

引用文献

伊藤 勝久. 2013. 学校教育における「アイヌ民族の学習」の課題. 環太平洋・アイヌ文化研究, 10: 19-30.

清水 敏行. 1996. 北海道の小学校社会科副読本におけるアイヌ民族. 僻地教育研究, 50: 17-51.

清水 敏行. 1998. 小学校におけるアイヌ民族教育に関する調査. 僻地教育研究, 52: 43-53.

鈴木 哲雄. 2007. アイヌの歴史文化学習の課題と可能性. 北海道教育大学紀要 教育科学編, 57(2): 125-139.

中村 和之. 2015. アイヌ考古学と歴史教育. 季刊 考古学, 133: 76-79. 雄山閣. 東京.

百瀬 響. 2016. アイヌ文化教材化の要点について（3）−アイヌ文化を小学校社会科の地域学習に含める際の留意点について−. 北海道教育大学紀要 教育科学編, 66（2）: 89-98.

米田 優子. 1996. 学校教育における「アイヌ文化」の教材化の問題点について−1960年代後半以降の教育実践資料の整理・分析を中心として−. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 2: 123-148.